

FIAFブエノスアイレス会議報告
A Report on the 65th FIAF Congress in Buenos Aires

岐路に立つシネマテーク

——あるべき姿とさまざまなアイデア

岡島 尚志

Hisashi Okajima

連載:

フィルム・アーカイブ の諸問題 第68回

5月25日(月)から30日(土)までの6日間、国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の年次会議が、南米アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで開催された。ここでは、今回の会議について、シンポジウムでの議論を中心に、その概要を報告する。

アルゼンチン開催への努力

今回行われた第65回FIAFブエノスアイレス会議は、中南米あるいはラテンアメリカ諸国における近年の開催としては、1992年の第48回モンテビデオ会議(ウルグアイ)、97年の第53回カルタヘナ会議(コロンビア)、2006年の第62回サンパウロ会議(ブラジル)に次ぐものとなった(それ以前では76年と82年にメキシコ、90年にキューバでの開催があるが、筆者は参加していない)。アルゼンチンにとっては、数年の準備を費やしての待ち望んだ会議招致であったが、実際にはかなり厳しい国内事情の中で開催となった。

ホストとなったFIAF正会員フンダシオン・シネマテカ・アルヘンティーナ(アルゼンチン・シネマテーク財団。以下、FCA)は、館長ギジェルモ・フェルナンデス・フラードが、故パウリーナ・フラード(2004年逝去)らと創設した私立の映画上映・収集団体からはじまり、次第に公的なフィルム・アーカイブとしての体裁を整え、今日では内外から、実質的なアルゼンチンのステート・フィルム・アーカイブとして認知されるにいたってはいるが、内情はといえば常に経済的な困難をかかえ、充分な自国映画の収集・保管システムを法的にも技術的にも確立しているとは言いがたく、まさに難問山積の状態である。今回の招致を積極的に推進したマルセラ・カッシネッリ副館長は、結果的に国内に関してはご

く少数の公的機関からしか支援を受けることができなかったこと、ほんの数人のFCAスタッフによって開催の準備と運営が行われたことを告白しつつ、「昔も今も全部自分たちでやってきている」と胸を張った。事実、サルタ通りにあるFCAの建物は、ビルが丸ごと一つフィルムと関連資料の巨大な倉庫として機能しているが、一方でそこは映画学校でもあって、その経営から上がる収益の一部が映画保存にも使われているというのが実態のようである。

1957年という早い時期に中南米諸国の中では最初のFIAF会員となったFCAは、誇り高いアルゼンチン人気質も手伝って自主独立の気概を強調するが、客観的に見るとアルゼンチンという国が体験してきた複雑で困難な20世紀史をそのまま背負っているようにも感じられるのである。

会場となったのはコリエンテス大通りをはさんで対面する新旧のビルで、新しい方は、オペラシオン文化センター(CCC)、古い方は、老朽化が激しいとはいえ、ブエノスアイレス市民の文化生活に長年にわたって多くの思い出を作り上げてきた町のシンボリック建物でもあるコンプレホ・ヘネラル・サンマルティン(別号コンプレホ・テアトル・デ・ブエノスアイレス、CTBA)である。CCCでは地域会合やワークショップが行われ、CTBA内10階にあるサラ・レオポルド・ルゴネスというホールでは、シンポジウムや総会が行われた。

参加人数は、開催前に大きな話題となったメキシコ、アメリカを中心とする新型インフルエンザの流行による影響や渡航の躊躇にもかかわらず、結果的には200人を越えて第63回東京会議並みの規模となり、FCAら受け入れ当事者を安堵させた(ブエノスアイレス内からの参加者40人を含む)。

シンポジウム「シネマテーク——新たな観客を求めて」

25日と26日の両日行われたシンポジウムのテーマは、「シネマテーク——新たな観客を求めて」(The Cinematheques in Search of Their New Audiences)で、第1日は、アフリカ、ラテンアメリカ、アジア、北アメリカ、ヨーロッパの順で、各地域の代表がそれぞれの地域または国内のシネマテーク上映事業について報告や傾向分析を行い、第2日は、「ニューメ

ディアの世界における映画文化の視野と文脈」「教育と映画: 未来の観客」「新しい技術と未来の観客」「上映番組作りの傾向と挑戦」「特別なイベント」「映画祭、シネマテーク、批評家: それぞれの役割」といったサブテーマを設定してのプレゼンテーションとなった。ホスト側の計画とプログラミング & アクセス・コミッション(PACC)のプランとが十分に調整されないまま本番を迎えたこともあって、全体に準備不足の感否めず、さらにパネリストの参加が直前にキャンセルされたり、パネリスト間の議論が噛み合わなかったりといったことが少なからず起きたりもしたが、テーマ自体は世界中のフィルム・アーカイブ/シネマテークにとって焦眉の共通課題でもあり、両日を通して活発な議論が展開されることになった。

契機となる問題提起をしたのは2人の名誉会員ロベール・ドードランとデイヴィッド・フランシスで、前者は「世界の美術館に、過去20年間、かつてのピカソに匹敵するようなブロックバスターが現れていないように、映画もシネマテークも停滞しており、長きにわたって変わらないことも重要だが、一方で爆発的な力のある新しいアイデアも必要だ」と語り、後者は「新たな観客を捜すというテーマは半世紀前から続く設問でもあって、新しいアイデアと古いアイデアを組み合わせる必要がある。かつてアーネスト・リンドグレンが言ったようにアーカイブは第一級のプリントを用意して、作品の解説(ノート)を用意するという仕事の基本を忘れてはならない。アーカイブの新しい取り組みとして重要なのは、巨大な観客を抱えるテレビやインターネットのようなメディアを躊躇なくさらに利用すること、所蔵リストをもっと公開できるようにすること、キュレーションとアクセスという相反しやすく共に重要な要素の共存を図り、映像産業との間にウィンウィン関係を構築することである」との指針を述べた。

若者の映画離れとシネマテーク

これらに呼応する形での発言が多く続き、ニューヨーク近代美術館(MOMA)映画部門やパシフィック・フィルム・アーカイブ(PFA)ら北米の伝統的なシネマテーク付設機関からは、「(少子化や若年層の減少といった)人口統計論的な議論に陥ることなく、長年続けてきた恒常的な上映企画を、紙などによる文脈化も含

めて、今後も自信を持って“教育的に”継続することが大切であり、必要なのは大変革ではなく構造変化への対応である」という意見が出された(因みに、PFAのシーズン・オクストビーによる上映番組は、現在、世界最高のものの一つだと思う)。MOMAのラジェンドラ・ロイは、「アメリカでも日本でも、またMOMAでも東京のフィルムセンターでも、若者あるいは学生の映画離れという同じ現象が起きており、MOMA観客の非学生率は70%に達する」「若者のためのブロックバスターとして機能した近年のヒット企画としては、ティム・バートン特集、ピクサー特集、スタジオ・ジブリ特集などがある」と語った。

一般に“国立映画劇場”の名を冠することも多いFIAPアーカイブ/シネマテークでの上映は、国や都市によって事情が大きく異なり——例えば、日本で言えば岩波ホールが単館興行する“スペシャライズド系”新作フィルムを、フィルムセンターにあたる公的機関が上映する国も少なくないといったように——その違いがシネマテークの“非学生率”に大きな数値的影響を与えるという事実は無視できないが、総体として見れば、少数の商業的ブロックバスター——美術館の世界では、ルーブルを訪れて有名な作品しか見ないことを揶揄するモナリザ・シンドロームという言葉があるらしい——を例外として、いわゆる“若者の映画(館)離れ”が、興行・非営利を問わず深刻な世界的傾向になっていることは間違いない(スペインなどは若年層の映画離れが起きていないと胸を張ったが、それに対して「ラッキー・スペイン!」などと発言する人もいた)。

そうした事象への危機感に呼応して、シネマテークという“教育現場”を次世代観客である子供たちに限って無料化する、学生には公的なアーカイブと大学とが連携を図りながら無料鑑賞の機会を作る、といったスキームは世界各地で始まっている(あるいは始まろうとしている)ことが今回の発表でよく分かった。ただし、これには「無料番組化は映画を見るという文化制度を破壊する反教育的なものだ」との反対意見も

根強くある。そんな中で、MOMAのように、選んだ映画の上映にニューヨークの子供たちを招待し、そうした教育的上映イベントのスポンサー(メディア企業など)には夕食の提供といった支援まで依頼するという積極策をとるところもあって、反響を呼んだ(ある金曜夜のプログラムで『ユージュアル・サスペクツ』(1995年)を上映したときに用意された配達ビザは、ラージサイズ25箱に達したという)。

映画教育の可能性

学生や次世代観客への“映画教育”は、優れた芸術作品を見せること、無声・白黒映画等を体験させること、もって映像理解能力を高めることなどから、社会・地理・歴史教育、ジェンダー・スタディなどに映画を活用することまで(さらには映像文化財保存の重要性を啓蒙するところまで)広範囲にわたっているが、それらについての効果的かつ効率的なアプローチが何であるかについては議論が分かれているのが現状である。すなわち、DシネマからiPhoneまで次々に現れる新しい技術が映画におけるモナリザ・シンドロームを完全に解決してくれるわけでもないという問題が、都市圏人口が200万に満たないコペンハーゲンで公的なシネマテークでの上映が週40回を越えていることを今後どう考えていくのかという問題と共存しているのである。「テレビ番組にフィルム・アーカイブ・チャンネルを組み入れるべき」、「MOMAの名作主義、PFAのアヴァンギャルド、ベルギー王立シネマテークの無声映画といった長年培われてきたFIAP機関の個性的なプロファイルは維持した方が良い」、「映画教育を学校教育のカリキュラムに組み入れることが先決だ」、「映画離れの一方で、人気の映画祭はどこともチケットがすぐに売り切れるという事実もある」「新たな観客を捜すならもって映画音楽/音楽家に焦点を当てるべきだ」等々のリマークが続く中で、強い印象を残したのは、ロンドンとパリの発表である。前者はBFIナショナル・アーカイブが先進的なBFIサウスバンク・メディアテークの映像提供システムを紹介した

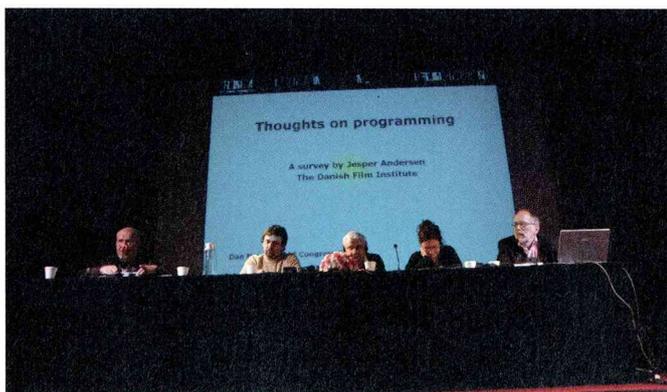
もので、昔からの充実した映画上映番組とは別に、大量のアーカイブ・フッテージが自由にブラウジングできる(予約制)というもの、後者シネマテーク・フランセーズの方は、最も伝統的なミュージアム・アプローチによって開催されたジョルジュ・メリエス展に8万人(!)の集客があったという報告である。

もう一つの面白い試みは、「クレージー・シネマトグラフ」である。これはルクセンブルグのアーカイブがヨーロッパ各国アーカイブの協力を得て数年前から始めた“移動見世物小屋”スタイルの映画上映施設の名であり、そこでの上映・上演プロジェクトでもある。百年前のヨーロッパの町に市(フェア)が立ち、その広場にテント掛けの不思議な小屋ができる。呼び込みの声につられて入っていくと、中は怪しげな奇術、踊り、そしてひたすら無声映画(昼は子供が喜ぶ演し物、夜は大人向けで、中にはポルノ・アニメーションも……)という一種のパレスク・シネマであり、きわめて高度な教養文化的な試みでありながら、同時に猥雑な19世紀のサブカルチャーの再現でもあるというところが素晴らしい。新たな観客を探すシネマテークが、街に出て一世紀を遡ってしまったという点がなによりも新しいというべきか。

おわりに

シンポジウム全体にわたって、①良質のフィルム・プリント上映が、②「文化の翻訳者」(M・レーベンシュタイン)たるキュレーターによる文脈化によって新鮮で豊かな意味を持ち、③追加技術としての新たなメディア・アプローチと組み合わせられることで、新しい観客と出会うというシネマテーク像が語られたのは、いかにもFIAP的であるが、UCLA映画テレビ・アーカイブのクリス・ホラックが、学生に向けた無料番組提供の是非に触れながら、「シネマテークという場所に備わっている映画に対するある種“宗教的”とも言い得るアティテュードこそが新たな観客を育てる」とコメントしたのが、奇妙なほどに説得的であった。

(フィルムセンター主幹)



シンポジウムの模様(2点とも)

